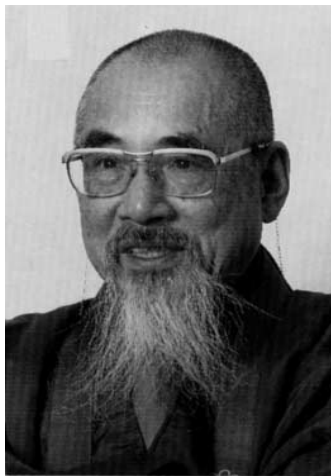




二つの転生物語

— 遠藤周作氏の小説を読んで —

秋月 龍珉

あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧
著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—一休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。

もうだいぶ昔のこと、山田無文老師が朝日講堂で講演されたある夕べの話である。法話の後で舞台裏の控え室に老師を訪ねた。かねて老師の熱心な信者だった老婆が先に来ていて、ふと老師に問いかけた。

「老師さん、私ら死んだらどうなりますのじゃ。」

老師は無造作に答えられた。

「死んだらおしまいじゃ。身も心も何にも亡くなる。」

一瞬、老婆は淋しそうな顔をした。

「何にもないんですか。魂もないのですか。」

老婆の様子を見て老師は言われた。

「そうじゃな。自分のためなら、靈魂も何もないがな。菩薩はなあ、後に残って苦しんでいる愛する者の所にもどってきて、何かをしてやらんとな。」

老婆は心からほっとした顔で、師匠の言葉に安心しきったふうだった。

そのころ、晩年の鈴木大拙先生に毎週接していて、大拙先生がよく「極楽は、往ききりにする所ではない。往ったらすぐに還^{かへ}ってきて、娑婆で苦しんでいる者の苦しみに代わるのだ」と語られるのを聞いていたので、まったく「君子は同風だな」と感心したものだ。

仏教における輪廻転生の考え方

日本人のほとんどが、仏教は「輪廻^{りんね}」の思想を説く宗教だと誤解している。これを「転生^{てんしょう}」ともいう。試みに、手元の『仏教辞典』を引いてみると——

りんね【輪廻】梵語「サンサーラ」の漢訳。「流転」とも。インド古来の考え方、人間が生死を繰り返すことをいう（転生）。仏教では、三界（欲界・色界・無色界）・六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）に生死を繰り返すことをいう。（誠信書房刊『新・仏教辞典』）

生まれ変わりとか、あの世の話など、前近代的と心配してか、この辞典は続けていう——

六道は現代的に考えれば、怒り・貪欲・愚痴・争い・喜悅などの意識の段階を繰り返すのが人間というものであ

るということになる→再生。

さいせい【再生】いったん死んだ者が再びよみがえること。

信仰に入って新しい生活を始めること。あるいは再びこの世に生まれることなどの意に用いられる。インド固有の思想としては「輪廻」思想があるが、仏教はこれを取り入れ、「業^{ごう}」説（カルマの思想）に基づいて仏教独特の輪廻説を立てた。すなわち過去の善悪の「業」（行為）が現在の善悪の果報を招くということである。悪業をなしたものは地獄・餓鬼・畜生などの惡趣（三惡道、修羅を加えて四惡趣）に生まれるが、五戒を守る者はその果報として人間界また天界に再生し、よく「法」（仏陀の教法）を聞き実践する者は「業」を断ち切って、「輪廻界」を離れ、悟りの世界（涅槃^{ねはん}）に至ると説く。のちに大乘仏教の時代になると、利他思想を強調し、自利利他を円満した菩薩は、衆生済度のため、種々の形を取って人間界に還って、迷える人々を悟りの世界へ導くと説く（同上）。

別の辞典はまたいう——

るてん【流転】生まれ変わり死に変わりして、六道などの迷いの世界のうちを廻り続けること。「輪廻」に同じ。サンスクリット「プラヴリッティ」原語の意味は“転ずること”で、次の状態に移ることをいう。輪廻してやまないことを「流転門」といい涅槃に趣いて輪廻の世界から解脱することを「還滅門」と称する（『岩波仏教辞典』）。

以上で、だいたい仏教に説く「輪廻」の意味を学ぶことができよう。先の現代的解説についていうと、一生を終えて次の生に生まれ変わるのを「一期^{いちご}の生死^{しょうじ}」といい、一念一念の心理的段階の生死を「刹那^{せつな}の生死」という。次の大乗の解釈についての仏教語としては、悟って仏陀（覺者）となった者、輪廻の生死（生と死でなく、「迷いの生」の意）を解脱した者は、「業生^{ごうじょう}」（自己の業に引かれての生死）はないが、「願生^{がんしょう}」（利他の願の故の生死）はある——大死や無文の語参照——ということである。

先に、日本人のほとんどが仏教は「輪廻」の思想を説く宗教だと誤解していると断言した上で、私は仏教——初

FAITH



期(南方)仏教・大乘(北方)仏教——における「輪廻」の考え方を解説してきた。

では、なぜ「誤解」なのか。それは、仏陀釈迦牟尼は悟った直後に、「わが心の解脱は不動である。これが最後の生存である。もはや再生はありえない」と宣言された、と初期経典に伝えているからである。この金口の直説によるかぎり、仏教には「輪廻」はあり得ない。釈尊は輪廻生死を解脱した。仏教にはその意味で、輪廻転生はありえない。ただ初期仏教では、聴衆である大衆が皆な輪廻を信じていたので、それを前提として法を説いたのであり、大乘では生死を解脱したが涅槃に往まらぬ心から、「願生」を説いたのである。いわゆる「無往涅槃」である。その意味は、智慧によりて生死に往せず、慈悲によりて涅槃に往せずということである。亡き恩師鈴木大拙先生は、ここに**仏教の真髄を見ると、常に説かれた。**

遠藤周作氏の小説『深い河』

三年前、遠藤氏がその作品『その夜のコンヤック』(1991年文春文庫)という本を贈ってくれた。遠藤氏はカトリックの信仰を公けに告白している作家である。母君に受け継いだ大事な信仰だが、何となく日本人としての自分にぴったりこないところを感じて、西洋人の洋服を着たキリストに日本人の着物を着せ直したいと努めている人である。私が青年前期に大きな影響を受けた日本組合教会の牧師和田信次先生は、よく言われた。「イエス・キリストはもともと東洋人だ。それがヨーロッパ経由で日本に入ってきたので、日本人にぴったりと来ないところがある。一度イエスから洋服を脱がせて、裸のイエスを見ることだ」と。そうした私は、かねてから遠藤氏の仕事に注目してきた。

この文庫は帯封に、「死の向う側は無……なんて、あなたはまだ信じていますか?」とあり、太字でさらに「既視・幽体離脱・輪廻転生」と記してあって、今日世界的に騒がれている問題を取り上げている。そこには主人公が戦争にかり出されている間に、妹が散歩中に両親と離れて、原宿の辺りで米軍の空爆で死んだ。その妹が自分の孫の男の子として転生した、というような話が書かれている。キリスト教作家として、インド伝来の輪廻思想を真っ向から取り上げたものだ。興味をもって読んだものの、前述のように

仏教の悟りの立場からは輪廻など認めがたいので、どちらかという、私のこの本への感想は冷やかで否定的であった。そのことは昨年出版した小著『誤解だらけの仏教』(柏樹社)の中で、梅原猛氏の『日本人の魂』(光文社カッパホームズ)への批判とともに、すでに考えを述べておいた。

ところが昨年遠藤氏は『深い河』(講談社)という単行本の小説を出版した。近くの書店で聞くと、だいたい世間で評判になっている小説だという。早速買って、この正月休みに一気に読んだ。久しぶりに深い感銘を受けて小説を読むという体験をした。小説にこんな深い感銘を受けたのは、はるか昔の青年時代以来、たえてない経験だった。

この本の主人公は大津というカトリックの神父である。彼は畏友紀野一義君の言葉でいえば、「生きることの下手な人」の典型みたいな愚直な人間である。学生時代は級友たちに馬鹿にされ、やっと得た恋人には捨てられる。ヨーロッパに逃げて修道院に入って司祭になるが、そこでもみんなに理解されず、異端者扱いで、いっそ東洋の異教・仏教徒のほうが君にはふさわしいとまで言われても、「私はイエスさまに掴まった人間だから」と言って、あくまでも神父として生きる。そして、流れ流れて、インドのヒンドゥ教徒の中で自分なりの生き方をする。

インド人は死ぬと火葬にして骨と灰を聖なる河に流してもらうことを最後の望みとする。貧乏でそれもかなわず、のたれ死にした人々の死骸をかついで火葬に付して骨灰を河に流す、そんなはぐれ神父の生きざまを、遠藤氏は描く。妻が死ぬとき、「私は必ずこの地球のどこかに再生するから、探してね」と言われた夫が、「日本人がインドで転生している」というアメリカのさる協会のニュースをたよりに、インドに来る。その妻の看病をした女が、たまたま大津を捨てた恋人で、これも何となく大津にひかれてインドに来る。まあ、言わば遠藤氏の輪廻転生物語の第二作というわけ。

しかしこの二つの輪廻転生物語は、基本の思想がまったく違う。遠藤氏はこの作品で、はぐれ神父の大津の生きざまに「イエス・キリスト」その人の転生を見ている。これは「転生」というより「復活」である。キリストの再生である。「死んで生きるが禅の道」という。「復活がなければ宗教は空しい」と大拙先生も言われた。インマヌエル・アーメン!